



下野新聞 認知症カフェ プロジェクト2022

オレンジコラム

第四回

自分を他の誰かと
間違えられてしまったら



永島 徹

自分を他の誰かと間違えられてしまった時、ご家族は大きなショックを受けます。家族のことがわからなくなってしまうのではという不安から「私のこと誰だかわかる？」などと聞いてしまふこともあるかもしれません。本書の事例22で登場する節子さんの長女も、母から母の妹（叔母）と間違えられてショックを受け「認知症が進んでしまったのでは」と不安になってしまいました。

元々社交的な母節子さんは、70歳まで大企業の食堂で調理員としてバリバリ働き「食堂のおばちゃん」と言われ慕われていたそうです。そのような節子さんも、老いと共に心身状態が変化し、アルツハイマー型認知症を発症しました。寄り添う夫も年長りの変化が顕著になっており、心配した近隣に住む長女が、ほぼ毎日訪れて買い物や通院などのサポートをしてきていました。そんな折り、いつものように訪れた長女を見るなり「お父さん、チャコちゃん（妹）がきたよ」と言い出したのです。驚いた長女は「私だよ、何を言っているの」と訂正しますが、その後も妹と呼んで世話を焼こうとするのでした。

ないということですが、そのことが「記憶が編集される仕組み」や、「大昔の記憶は消えにくい」という記憶に関するメカニズムから紐解かれています。そして、目の前の長女を妹と呼ぶのは、節子さんにとって二人がともに見るべき人であると感じているためということも分かってきました。目の前にいる人を別の人と混同してしまうという状況は、その人生の中で大事な記憶と関係していると考えられるのです。節子さんがチャコちゃんと呼ぶのは、自分の大事な記憶の中の妹。その妹と混同してしまうくらい、目の前の長女が存在を大切に思っているということです。自分を他の誰かと間違えられたら、どうしたらよいかわかっています。でも、そんな時こそ間違いを訂正するのではなく、大切な人との思い出を話してもらえように働きかけてみてください。目の前の大切な人と一緒に記憶の中の大切な人の話をすることで、思いがけないようなご本人の思いを聞くことができるかも知れません。

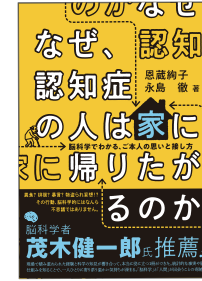
なぜ、認知症の人は
家に帰りたいがるのか

脳科学でわかる、ご本人の思いと接し方

著者：恩蔵絢子 永島徹

定価：1,760円（税込）

発行：中央法規出版



NPO法人 風の詩 理事長
日本認知症ケア学会 理事
ながしま とおる
永島 徹
(認定社会福祉士・認知症ケア専門士)

私たちは「下野新聞認知症カフェプロジェクト」を応援しています。



企画協力

